



どうする家康 浜松 大河ドラマ館

2023年の大河ドラマ「どうする家康」の放送に合わせ、大河ドラマの世界観を体感することができるための施設として、仮設建築物として設計しました。家康公が29歳から45歳まで過ごした浜松の歴史的・文化的特徴・風土の紹介や「出世の街」浜松のチャレンジ精神を発信することにより、地域全体が活性化する事も目的としてデザインしました。

デザインのポイント

浜松市の歴史・文化・風土をイノベーション、サスティナブル、うきうきワクワクのコンセプトでデザイン
「浜松市北側に広がる天竜の森」を東京オリンピック選手村から返還されたレガシー材を用いて表現
環境省の気候変動アクション大賞を受賞した特別な仕様を用いない「普段着のZEB」による環境デザイン

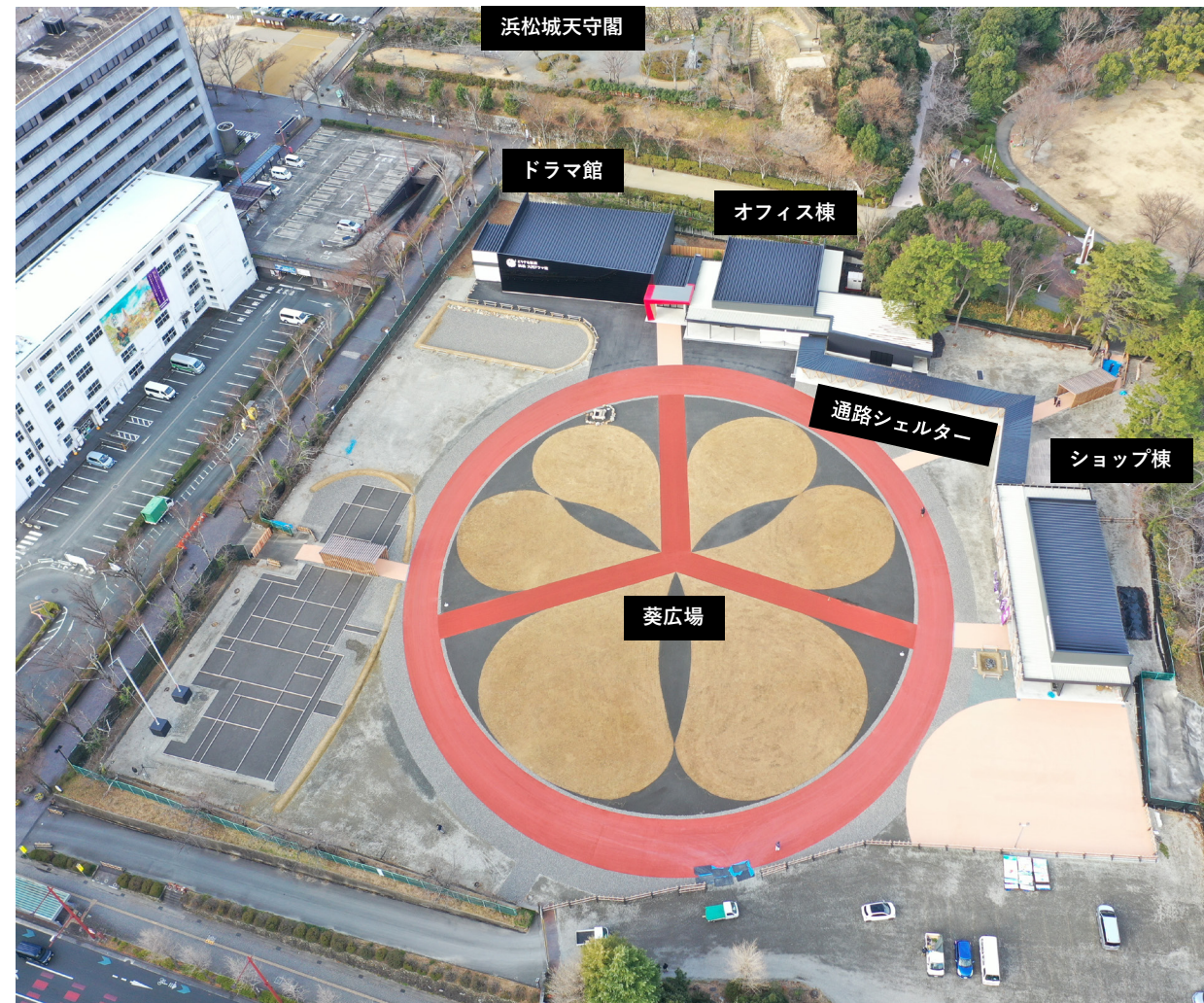
デザインが生まれた理由/背景

浜松地方には「とにかくやってみよう」「やろうじゃないか」という意味の「やらまいか」という言葉があり、このチャレンジ精神を大切にす
る風土から、音楽や自動車産業、光・電子産業など、世界を代表する企業が輩出されてきました。この精神は三方ヶ原合戦に敗北した家康公が、
様々な革新的な策を実行し天下統一まで成し遂げた事から現在につながっているのではないのでしょうか。
どうする家康 浜松大河ドラマ館では「やらまいか」からくる「イノベーション」をメインコンセプトとしてデザインしました。環境問題は現
代の避けられない難題で、環境にやさしく、再生可能なサスティナブル建築も目指しました。また、ドラマ館が閉館した後も浜松を訪れてもら
えるように心がけた設計としました。

デザインを実現した経緯

【目標・創意工夫】 赤いエントランス位置には二の丸御殿の裏門があり、天守閣から裏門を結んだ線上を葵の御紋の中心として敷地全体の構成
を考えました。大きな家紋は天守からの円形に見える様ように楕円にデフォルメし、ドローン等の空撮でもインパクトがある様デザインしまし
た。来場者の動線と関係者動線を分けながら、うきうきワクワク感が感じられる様に建物配置を決め、各建物をデザインしました。斜めに
切ったスカイラインやピアノブラック素材によりイノベーションを表現し「普段着のZEB」によりZEB Readyを達成しました。
【成果】 13ヶ月の来場者目標は50万人で、残すところ3ヶ月（10月末現在）で45万人が来場しています。また、開館時より市民から「徳川家関
連の施設として何らかの形で残してほしい」といった意見が多く寄せられ、徳川記念財団が所蔵する資料を収蔵・展示する施設として存続する
方針が決まっています。

浜松城天守閣と大河ドラマ館



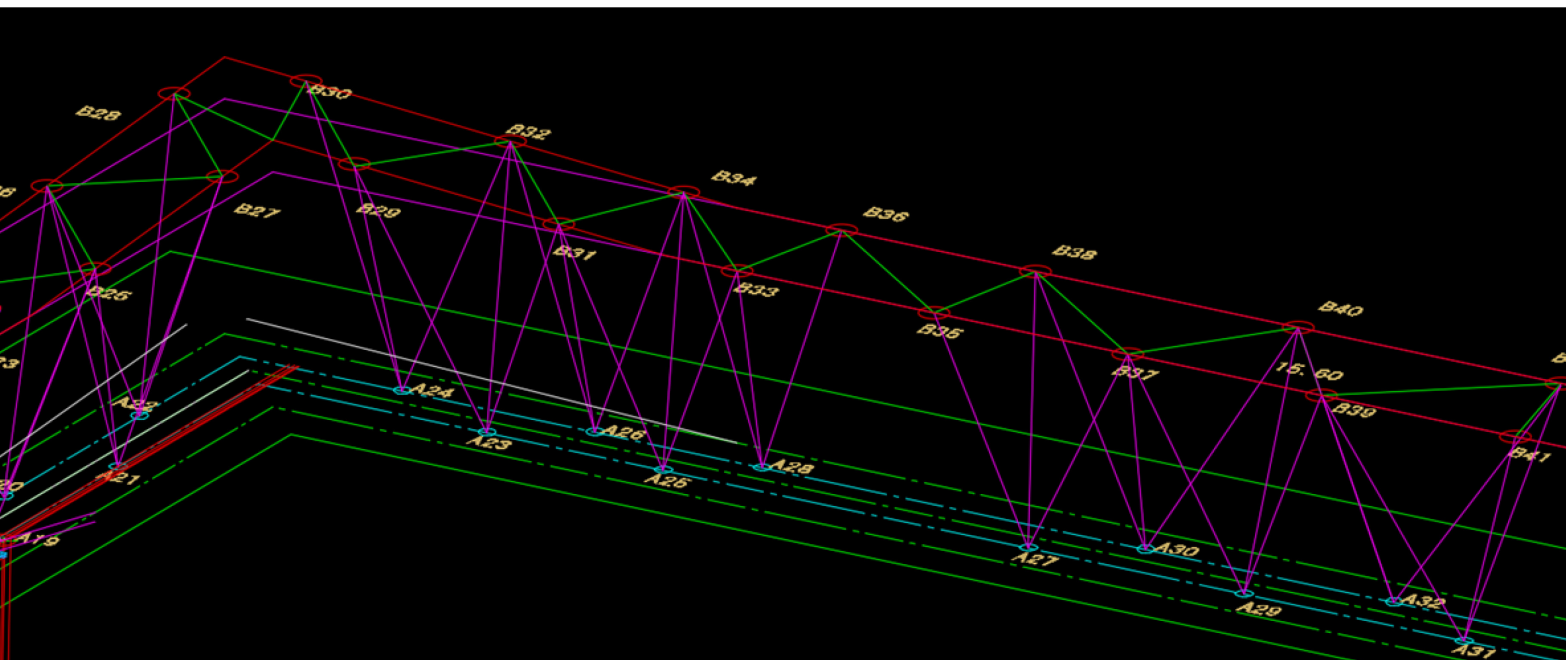
浜松城出世パーク | 会場全体に賑わいを創出する計画が施されている



つながる想い～東京五輪から大河ドラマ館へ～

～Used in Village Plaza を活用しました～

東京オリンピック2020の選手村ビレッジプラザで使用され、浜松市に返却された天竜材（FSC認証材）を、大河ドラマ館とオフィス棟、ショップ棟をつなぐ通路シェルターの柱、ショップ棟前のウッドデッキ、二の丸御殿の再現フレームなど様々な場所に活用させていただくことで、東京オリンピック2020の選手村などに届けた天龍材の記憶と関係者の想いを、今一度大河ドラマ館の場に再現させていただきました。



コンピューター利用により正確な部材寸法と構造検討を可能にしました。

通路シェルター | 選手村の構造計画をオマージュした構造グリッドで構成

選手村仕様材を証明す焼印・傷などもそのまま利用



ドラマ館からショップ棟の眺望 | 人工的な天竜材による木製フレームで天竜の森林をデザインした



ドラマ館 | ピアノブラックの外壁と『ZEB Ready』

音楽のまち浜松をイメージするためにドラマ館にはピアノブラックの外壁（サイディング）を採用しました。また、期間限定の仮設建築物であっても環境性能を犠牲にすることなく、須山建設独自のZEB設計手法である『普段着のZEB』を活用しZEB Ready(1次消費エネルギー59%削減)を実現しました。



須山建設の『普段着のZEB』の設計手法により、ドラマ館で『ZEB Ready』を実現しました。



オフィス棟 | ドラマ館全体の本陣をイメージ

チケット売場やトイレなどをはじめ大河ドラマ館全体の管理機能を司るオフィス棟には、戦の本陣をイメージさせる「陣幕」を設置しました。また、計画変更により実際に発掘された城壁跡を展示するための城壁展示室を一体で計画。城壁の劣化を防止するための空調管理、開口部、湧水対策などの配慮を施しています。



ショップ棟 | 天竜の森林をイメージ

ショップ棟前面には通路の日除けと共に、浜松市北部に広がる森林をイメージする天竜材を用いた木製フレームをデザインすることで、単なるお土産売り場のイメージを払拭しました。

またショップ棟横には、来場者が休憩できるウッドデッキを計画。ウッドデッキにはオリンピック選手村の床材で利用されたレガシー材を再利用させていただき、オリンピックの感動を浜松に持ち帰り、市民の皆様にも広く触れていただく場を創出させていただきました。



レガシー材を再利用したウッドデッキ



仮設建築物だからこそ～『市民の記憶に残る建築・建設を』

大河ドラマ放映期間の観光客集客のための仮設建築物として計画、設計された「どうする家康 浜松 大河ドラマ館」ではありましたが、一過性のイベント目的の仮設建築物に終わらないように、建設中に建設現場内において、浜松市主催の市民参加型のドラマPRイベントを何度か開催させていただきました。

葵広場の仮舗装時、舗装着色前の2度に渡り、数百人規模でチョークによるアート、メッセージを描くイベントでは、須山建設所有のドローンで空撮をさせていただきSNS発信などに活用させていただきました。

ドラマ館の床仕上げ直前には、水性マーカーで床のコンクリートにドラマへの期待や出演者へのメッセージなどを書き込んでもらいました。

このように建設中から敷地や建物に想いを持っていただくことで、一人でも多くの市民の記憶に残る建築・建設になるように…と心より願っています。

